

## 藤本英夫氏の業績とその再検討

### 藤本氏が進めた埋葬頭位研究

本ニュースレターの初回となる今回は、藤本英夫氏による埋葬頭位研究を取り上げます。彼は北海道のアイヌ文化と縄文時代遺跡における埋葬頭位（どの方向に枕を向けたか）の比較検討をおこなった人物です。後藤明著『天文の考古学』（同成社）では231頁で紹介されており、そこでの記述に触発され、私も後追いで藤本氏の著作を読み進めています。

この1950年代末から1970年代初頭におこなわれた研究が、現在へと続く縄文時代の埋葬頭位研究の先駆けともなり、その後の基礎を築いたことも確かだと思います。

道内各地の高校の教員を勤めながらアイヌ文化研究に精力的に取り組んだ藤本氏は、アイヌの人々の埋葬が東西方位を重視し、死者の魂を西方の彼方にある死者の国「下方の国」に赴かせるべく慎重に埋葬姿勢を決定する習俗に注目しました。「太陽の落ちる方に下方の国がある」との伝承から、藤本氏はあの世の方向にも振幅があった可能性をみいだしています。

さらに縄文遺跡の調査を重ねる過程で、そうした習俗の源泉は縄文文化に求められることを力説しています。アイヌや縄文の方位観が年間の太陽の運行に沿って定まっていたとなれば、東「善の方向」や西「悪の方向」は、それぞれ正方位東西から南北に35°前後の扇状に広がった範囲を指したことになります。

だとすると、ここからふたつの可能性が浮上します。その第一は、彼らの方位観は固定された線として四方を捉えたのではなく、扇状の幅をもつと考えた可能性です。その第二は、太陽の運行に沿って東西の方位軸は日々移動するものと捉えていた可能性です。藤本氏は後者の可能性をみいだしています。

### 静内御殿山遺跡の埋葬頭位

この点を検討するために彼がおこなったのは静内町の御殿山遺跡における縄文時代の埋葬頭位でした。もとよりアイヌの埋葬頭位が仰向けの東であり、死後立ち上がれば西に向かうという習俗とは対照的に屈葬・西枕となっていることなど、差違は際だつのですが、東西方位を重視する点での共通性に依拠した考察となります。さらに図示という視覚的手段に訴えてはいますが、統計的処理をおこなった早い段階での作業だとみてよいでしょう。

この先駆的な業績に対して、現時点での再検討を試みたいと思います。図1は藤本氏作成の元図です。先端が黒丸になった線が、この遺跡からみつかったそれぞれの埋葬の頭位です。長い線と短い線

が混在していますが、近似値を示す資料同士の重なりを避ける工夫のようです。西側に向けて扇状に広がることを確認できます。

しかし元図が作成された時点では、遠い過去の日の出・日の入り方位を推計するのは容易でなかったでしょう。そこで縄文時代後期後半と晩期初頭のおよその年代である紀元前1500年-1499年の日の出・日の入り方位を推計し、かつ周辺地形の起伏を考慮しつつ割り出した方位を重ねてみたものが

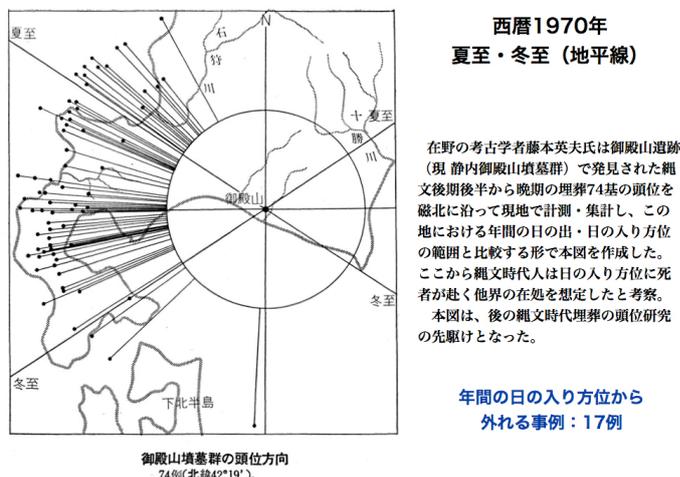


図1 藤本英夫1970『北の墓』学生社,157頁より転載

図2です。なお夏至の日の入り方位は元図とほとんど一致する奇妙な状況であることに気づかされますが、元図の計算結果は1970年時点における夏至の日の入り方位よりはるかに古い様相を導いたことと、周辺地形の起伏が考慮されていなかったことが原因のようです(92頁参照)。

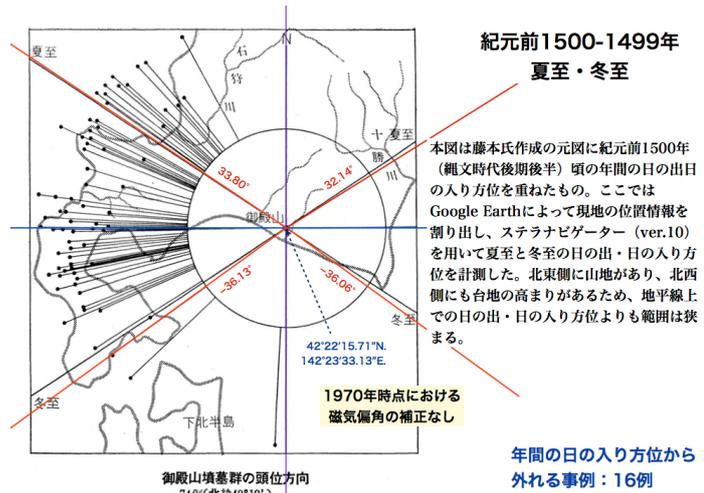


図2 藤本英夫1970『北の墓』学生社,157頁より転載

### 磁北基準の作図

さらに藤本氏は、現地において方位磁石を用いた埋葬頭位の計測を実施しています。図の解説がおこなわれている部分の記述もすべて磁北です。さらに本書の他の箇所でも、明治時代以降に和人が持ちこんだ方位観測の手段として磁北を用いた方位決定について述べられており(93頁)、磁北と真北との区別があいまいで、両者の区別はなされていなかった可能性が高いことに気づきます。

つまり元図に示された「N」は、真北ではなく調査当時の磁北だった可能性が濃厚なのです。その反面、冬至や夏至の日の出・日の入り方位について、藤本氏は方位磁石によって計測した痕跡がありません。いいかえると、図1の作図にあたって埋葬頭位については磁北を基準にし、日の出・日の入り方位については真北を基準にした可能性が高いのです。

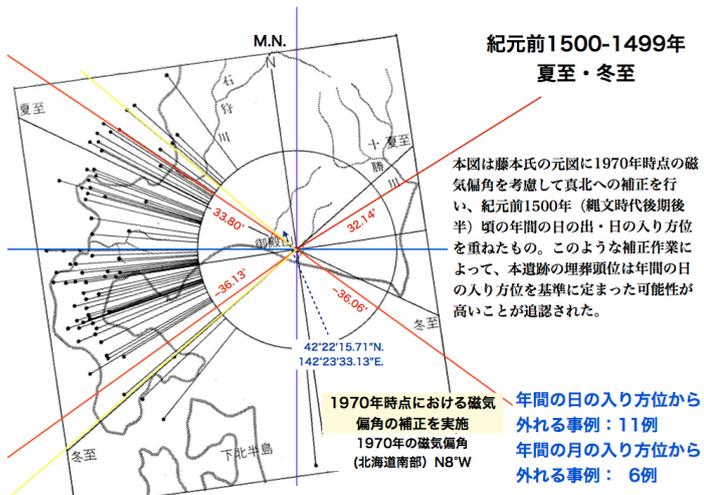


図3 藤本英夫1970『北の墓』学生社,157頁より転載

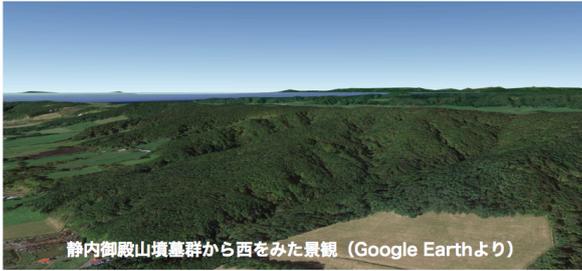
### 真北基準への補正作業

そこで1970年における磁気偏角表を利用し、北海道南部を横断する偏角8°ラインを基準に方位の補正を行いました。その結果が図3です。

以上のような作業を施すことで、藤本氏の先駆的業績を現時点の技術水準に沿って再点検することが可能になりました。

埋葬頭位はほとんどの事例が年間の太陽の運行の範囲内に(この場合は日の入り方位内に)収まることが確認できます。藤本氏の議論は逸脱例を17例として組み立てられましたが、図3を用いれば11例に減少することになります。それでも逸脱する事例が気になるので、月の年間の運行範囲を黄色の線で示してみました。すると逸脱例は6例に減少することになります。

要するに太陽や月の年間の運行範囲のなかに埋葬頭位を取めることが縄文時代人にとっての「しきたり」だった可能性が指摘できるのです。またこの遺跡の様相からは、縄文人が抱いたであろうと思われる他界の在処についても、重要な示唆が与えられると私はみえています。



	関東地方	福 島	東北地方		山形 渡路較正暦年代
			山形遺跡	宮城県中部～胆手振南部	
晩期中葉			第Ⅰ群土葬	「大洲 C2式」後半期	calBC760(Beta-219645)
後期後葉			第Ⅱ群土葬	「金野寺式」	calBC770(Beta-219644)
後期中葉			第Ⅲ群土葬	「宮ヶ野式」	
			第Ⅳ群土葬	「宮ヶ野式」	
			第Ⅴ群土葬	「宮ヶ野式」	
後期前葉	福之内1式	綱取Ⅱ式	第Ⅵ群土葬	「海神式」	calBC2030(Beta-219642)
	彩名寺第2群	綱取1式	第Ⅶ群土葬	「海神式」	
	彩名寺第1群		第Ⅷ群土葬	「海神式」	
中期末葉	加曾利 E4式	大木10式	第Ⅸ群土葬	「大木10式」後半期	calBC2290(Beta-219643)
			第Ⅹ群土葬	「大木10式」後半期～前半期後半	calBC2580(Beta-219640)
中期後葉	加曾利 E3式	大木9式	第Ⅺ群土葬	「大木9式」	calBC2670(Beta-220719)

表 縄文時代中期末葉から後期前葉を主とする土器編年

図4 相原淳一2009「東北地方における縄文時代中期から後期前葉に関する土器編年—宮城県石巻市山居遺跡の調査成果から」『東北歴史博物館研究紀要』10

のではなく、太陽や月の沈む方角それ自体が注視された可能性が高い、ということだと思います。

扇状に広がる埋葬頭位の様相は、それぞれの埋葬が執行された、まさにその日の太陽や月が向かう先に「下の国」があり、死者の魂はそこに向かうのだと考えられた可能性が高いことも物語っているようです。いいかえれば、彼らにとっての東西方位観とは、埋葬が行われた季節やその日ごとに変化する、振幅する、先に示したふたつの可能性の後者であったのではないか、そんなことを考えさせられます。

というのも、遺跡から南側一帯には海が広がっており、南西方向までは海が視界に入りますが、そこから北方に向けては緩慢に高まる丘陵の稜線によって海への視界はさえぎられます。埋葬頭位の示す先の半分は海に沈む太陽や月であり、残りの半分は丘陵に沈む太陽と月なのです。どちらか一方に偏るような様相は認められず、おおむね均等に広がります。彼ら縄文時代人が抱いた他界の在処をこうした景観上の様相から把握するなら、海や山が重要視された